

その日からシンパがハバロフスク発行の日本新聞を持って毎日思想教育が続く。洗脳されないと帰国できないというのである。みな洗脳されたふりをした。ナホトカで一か月くらい待たされ、六月十二日待ちに待った永緑丸に乗船すると夕方ナホトカを後に出航し、十五日舞鶴に上陸し、やっと日本の土を踏むことができた。

復員就職

舞鶴で復員手続きを済ませ、おのおの故郷に帰っていった。私の家では兄二人が満州に行っていたのであるが、昭和十九年二人ともフィリピンに渡り終戦になるとアメリカ軍の捕虜だったのですぐ復員したが、私だけ遅れて復員することになった。家に帰ると父がよく生きて帰れたと泣いた。

六月十七日復員し、約半年農業を手伝っていたが、十二月知人の紹介で年末年始の繁忙期で人手不足だから郵便局で働いてみないかと言われ、最初は非常勤として働き、翌年四月常勤職員として採用され、東京鉄道郵便局の職員として三十年間、北に西にと郵便列車に乗務し郵便輸送業務に携わったが、昭和五十七年モーターゼー

シヨンの発展とともに郵便物輸送も列車から自動車輸送に改革され、人員の配置替えがあったのを機会に勸奨退職を受け、三十四年間のポストマン生活を退職し、今日まで無職である。

シベリア、幻のように

岩手県 佐々木 徳 男

私が捕虜としてシベリアの強制労働に服したのはネーブルスカヤ収容所といって、バイカル湖を半周した湖岸の地点にある小都市、ウランウデからさらに西北に五百キロぐらい行った荒涼たる未開の地であった。

ネーブルスカヤという知名は美しい響きを持つが、名前とは裏腹に低いなだらかな山が起伏するだけの、ただただ殺風景な土地であった。

ここまで来るのに、満州の海林を出てからシベリア鉄道で二十三日間、真っ黒い貨物列車に揺られ続け、生かされるか殺されるか、全く不明のまま不安な毎日の明け

暮れを繰り返す旅程だった。

バイカルを半周するのに一昼夜を要したから、このバイカルの大きさはもちろん、ソ連邦という国の広大なことはそれでわかると思う。

ここで暮らした二年間は、わが人生の中での最も低落した期間、言うなれば、地獄の底を地で行くような生活で、求めようとして求め得られない、人間極致の生き態を見せつけられた体験であり、貴重というには余りにも哀しく、また惨い犠牲を強いられた生活であった。

その生活経験を何んの脚色もなく、ただの記録的ノンフィクションで書いたとて、この原稿用紙五百枚や一千枚は優に費やすと思うが、(今二百枚くらいまで書いている)その中から抜粋して書く事にする。

人間生活の必要な三条件は言うまでもなく衣食住であるが、私のシベリアの場合、三文字の上になるのは食であると思う。事それほど、シベリアを語るとき、「食」を抜きにしては到底語ることができない。

ネーブルスカヤ収容所の一日の食事は次のとおりであった。

朝食・コウリヤンがゆ、飯盒ぶたで約八分目

昼食・右と同じ。

夕食・右と同じに黒パン三百グラム、加給品として白砂糖二グラム、大豆油二グラム。

以上がソ連側からの給食であった。その食事で重労働に服するのだから、当然栄養失調で死亡する者が相次いだ。(昭和二十年九月以降同二十二年八月までの間)十センチ径、長さ二メートルほどの丸太を担いでも小石につまずくと直ぐ転んだ。それを見てカンポイー(看視兵)やカマンヂール(作業監督者)は「ヤボンスキー(日本人)、ラポータ(作業)、マロー(少し)、ニエハラショウ(よろしくない)」とあざ笑った。そのころ私たちはバーム鉄道と言われる軍用シベリア鉄道の建設に従事していたが、ノルマが厳しく、ノルマが達成するまでは食事抜きで働かされ、空腹で目まいを起こし、その場に倒れる者が出たりした。

十代から三十代の血気の若い者たちから自然と笑いが失われ、話といえは食べ物の話ばかりで、春の来るのがひたすら待ち焦がれた。六月も末になると、ようやくシ

ベリアにも春風が吹き始める。一日のラボータが終ると今度は山菜採りに精を出す。少しでも栄養を補給し、トウキョウダモイしなければならぬ。それまでは死んではいけないのだ。蛇も蛙も虫もみんな食糧になった。死にたくないから食うのでなく、生きるために体が要求するのだった。

あるとき、弊馬（病気で死んだ馬）が埋められたという情報が入った。私たちは闇夜の中をその現場に急いだ。暗闇の中を手探りでどことも知れない所をナイフで切り取って帰り、雪を溶かして芋の皮と一緒にペーチカで煮て腹一杯食べた。翌朝、手製の鍋の中を見て驚いた。鍋の中には黄色の沈殿物がどっさり沈んでいた。それは紛れもない馬の腸の内容物、要するに馬糞だったのである。

貧すれば鈍す、また、衣食たりて礼節を知ると古来から言われているが、まさにそのとおりだった。食べ物一つで人々が憎み合い、争った。戦友愛は一体どこへ行ってしまったのだろうか。食事分配の公平を期すために、小さい天秤がつくられ、秤が水平になるまで六十人の眼

がギラギラとそれを見守った。

そのときが一番私にとって悲しいときに思われた。一本のタバコも二人で分けてのみ……「戦友」の中の一節はただの美辞の唄い文句だったのであろうか……。

シベリアのタバコはロシア独特のタバコでマホールカといったきざみタバコだった。そのきざみを新聞紙でクルクルと巻いて吸った。ソ連兵たちは普通の巻きタバコで、彼らはそれを半分ほど吸い、ポイと捨てた。私たちはそれを拾おうとして群がり寄った。意地の悪いソ連兵はポイと捨てたのをわざと靴でグイと踏みこじって見せた。

私の歯の金冠に目をつけた機械倉庫のキャピタン（大尉）が、「その金冠を私にくれ。その代わり真っ白いフレーブ（パン）とタバコをモノーガ（たくさん）やる」と言う。「何に使うのだ」と聞くと、彼は左手の小指を出し、「マダーム（妻）のリングにする」と言った。思えば十四年間、私の肉体の一部としてその役目を忠実に果たしてきた金冠と別れるのは何としても不甲斐なく情けなかつたが、私はパンもタバコものだから手の出るほど欲

しかった。背に腹はかえられず、じつくりと分別することもなく、ただ一時の欲望に負けて私は金冠をキャピタンに渡した。彼は「ハラシヨウ」と言って帰って行ったが、翌日、わずかばかりのフレイブとマホールカを持って来、「残りは輸送車が入り次第持ってくる」と言いつて帰って行った。しかし彼はそれつきりネーブルスカヤから消えてしまった。他のラーゲル（収容所）に転動したという。

中部シベリアは夏の期間が十日くらいのもので、八月末からひひとして雪が降る。酷寒期には零下四十度以下になった。天幕をブアブアと鳴らして吹雪が荒れ狂う日があり、水銀柱がどんどん下がった。四十度以下になると空気中の水分が凍結して視界がゼロになった。さすがにそのときはラポータニエツト（作業なし）、スパーチ（休息）の伝令が各幕舎を駆けめぐった。私たちは零下四十度以下になることをどんなに待ち望んだことか……。天幕は二重張りの方錐形天幕という関東軍からの戦利品で、二段ベッド式に組み立て、その上下に六十人が収容された。一個小隊六十人なのだ。中央に大きな

ペーチカを置いてドンドン薪を燃やすから割り合い暖かいのだが、それでも矢張り深夜は冷え込み、大抵の者は寝小便をするようになり、朝起きてペーチカのそばで着衣のままですそれを干すと、特有の酸臭が立ち込めた。

私は上段のベッドに寝ていたが、私から二、三人離れたところに有田という若い兵隊がおり、それが夏になってもずっと夜尿し、「臭い」と、あたりから苦情が出るので、彼が作業に出た後、敷いてあった毛布を剥いで見ると、毛布とむしろの間にモリモリとウジがわいていた。

私達は尿のためにすっかり腐っているむしろを新しいのに交換し、彼がやがて作業から帰って来ても口を閉ざして黙っていた。それは、有田が悪いのではなく、捕虜という非人間的な環境がそうさせたからである。

オポールネ（便所）は間仕切りなしの十人くらいが一緒に入るように土が掘られてあり、用を足しながら隣り同士で語り合った。春から夏にかけては山菜を多く食べるので便はいつも青く、その量も多かった。ソ連人はそれを見て、「ヤポンスキー、クーシェ、クーシェ、モノーガ、オポールネ、モノーガ」日本人はたくさん食べるか

ら排便も多い、と馬鹿にした。

ドン底に落ちた人間関係は時として醜い争いを生じさせ、加えて重労働の厳しさに、私は生きる希望を失い、死んで楽になりたいと何度思ったか知れない。

昭和二十二年一月一日、その朝初めて白い米のおかゆを食べさせられた。二年間の中、それがたった一回だった。

スターリンは神様のように扱われていたが、彼のイデオロギーに反対する者も多くいて、それらは捕らえられて、私たちと同様、シベリアでの重労働に服せられた。彼らは口々にスターリンのやり方を口をきわめて批判した。

それから四十幾星霜、ソ連は今やペレストロイカ政策の真っ只中にあり、連邦内の共和国が次々と社会主義的自由社会を目指して変貌してゆく。私たちも当時、事あるごとに「スターリン元帥万才」を三唱させられたものだが、まさに隔世の感一しおと云ったところである。

さて、シベリア生活を書けば、前述したように書いても書いても書き尽くせない。これは一人私のみならず、

シベリア体験者のごごとくがそうだと思ふ。それほどシベリアは私たちに強烈な窮極なものを与えた。肉体的には死と疲労と栄養失調を、心理的には憎しみと悲哀と人間不信を……。

トタンを折り曲げて食器をつくり、針金を折り曲げた先端をヤスリで穴を開けて縫い針をつくる生活必需品の製法も必要に迫られて覚えた。要するに、生きる気持ちがある限り、人間は生きられるということを生ベリア生活で学びとった。

シベリア生活は確かに魂の放浪時代であり、餓鬼道にも等しい飢餓の毎日だった。

しかし、私はそこから、踏みつけられても生きてゆく雑草のような根強い根性と、生への限りない執念を知らず知らずの中に叩き込まれたような気がする。

ソ連人にも非道冷酷な人ばかりではなく、捕虜対戦勝者という関係を抜きにして私に目をかけてくれたカマンジュール（作業監督者）がいる。彼は白系のロシア人で、名はモロゾーフといった。その当時、五十歳を超えていたかも知れない。彼の息子二人は独ソ戦の時、レニング

ロードで戦死した。彼は私に、「マダム（妻）、イエス（いるか） マーリンケ（子供）、イエス（いるか）」と聞いた。私はイエス、と首を縦に振った。彼は即座に、オウ、ハラショウ（よい）、ハラショウと目を細めて喜んでくれ、私に熱いスープとパンを振るまってくれた。

それから一年後、私は偶然ナホトカで彼に会った。まるで夢のようだった。彼は大きな手で私の手を握り、「トウキョウダモイ、オーチェニハラショウ！」内地帰還、本当によかったと、我がことのように祝福してくれた。

それから四十何年、もちろん彼はこの世に存在していないかも知れないが、私の心の中には、あの優しい柔らかな眼もとの彼の面差しが今もなおそのままの若さで息づいている。

二回体験したダモイ

新潟県 井口 忠三郎

終戦を知ったのが八月二十日。日本無条件降伏にて、

私どもは、南満州錦県の飛行場に終結終了。九月五日、千五百人の編成にて錦県の駅を、二段式にわかづくりした貨車に分乗して、満州鉄道ですべり出した。南から北へと縦断した。北の果てにたどり着いたのが十一月二十六日、赤い夕日が西の端に没する夕暮れどき。私どもも輸送行程六十日余り。その間、ある駅に五日、次の駅に一週間と停車を繰り返して、後方より走ってくるソ連軍が略奪した戦利物資の貨車または私どもの仲間たちの輸送車等、数多く見送りつつ最北端黒河についた。

その黒河の町は、無残にも終戦時爆撃を受けて、私どもが泊まる所は赤れんがの大きな建物だったが、屋根は落ち、星明かりが見える寒々とした廃墟だった。板塀を剝がして暖を取り、明けて二十七日、結氷せる黒龍江を、手製のそりに各人の荷物を積み、対岸のソ連領のブラゴエチンスクに入る。

同日、満鉄と同じに二段式貨車に乗せられてシベリア鉄道を走る。日本海と間違えられたバイカル湖を過ぎ、捕虜列車はどこに行くのか。走り続けること三昼夜、着いた所は炭鉱の町。寒さで身を切りさかれる思いの夜半